

論 文 要 旨

申請者氏名 山本 晃彦

申請学位 博士

主論文題目

日本語学習者の学習意欲の変化とその要因
ーインドネシアにおける渡日前日本語研修の事例よりー

主論文要旨

第1章 序論

近年、日本語教育の領域でも動機づけ研究が注目されている。これまでの研究はいかに動機づけを高めるか、いかに意欲の低下を抑えるかといった視点で研究が行われてきた。しかし、意欲の維持のみならず、意欲の揺れとどのように向き合うか、どのように自律的にコントロールしていくかが達成目標の成功の可否を担う重要な鍵と言えるのではなかろうか。

本研究は以下の4点を明らかにすることにより、意欲の状態を自律的にコントロールすることが可能か否かを探ることを目的とする。

- 1) 学習意欲の維持：どのような学習者が意欲を長期間維持することができるのか。
- 2) 学習意欲の低下：学習意欲の低下の要因は何か。
- 3) 学習意欲の推移：学習意欲はどのように移り変わっていくか
- 4) 学習意欲の再生：学習意欲はどのように再生されるのか。

第2章 日本語教育における動機づけ研究の概観

ここでは学習環境の違いに焦点をあて、海外、日本国外でどのような研究が行われているかについて概観した。国際交流基金の2012年の調査によると、136の国・地域において日本語学習者は存在するが、動機づけに関する報告がなされている国はわずか十数か国で

あり、大学生の動機づけを扱ったものが多い。日本国内でも大学生対象が多いが、調査内容は動機づけとその他の要因の関連性を扱ったものや動機づけを高めるための実践報告も徐々に見られるようになっている。しかし、動機づけの変化を扱った研究はごく少数であった。

第3章 調査方法

本研究は主に質問紙による調査によって分析を進めていく。調査協力者は経済連携協定（以下、EPA）に基づくインドネシア人看護師・介護福祉士候補者であり、渡日前日本語研修の場において調査を行った。調査は2011年来日の第4期生と2013年来日の第6期生を対象に行った。以下、研修期間3か月の第4期生をK3群、研修期間6か月の第6期生をK6群と称する。質問紙は①学習意欲の低下した時期と要因、②自律的学習動機尺度を用いた。協力者数は①K3群：95名、K6群154名、②K6群144名、日本語を主専攻とするインドネシア人大学生44名である。

第4章 意欲の維持

まず、研修期間の長さで属性に焦点をあて、意欲維持率に差異がみられるかについて検証した。その結果、研修期間が長くなるほど意欲を維持し続けるのは難しいこと、意欲の維持状態に性差は見られないこと、日本語学習経験のある学習者のほうが意欲を維持しやすい傾向が見られることが分かった。

続いて、自律的学習動機の下位尺度について検討を行った。ここでは自己決定的に日本語を学ぶインドネシア人学習者に特有と思われる因子、「インドネシア的学習観」因子が抽出され、それが他の因子に影響を与えていることが分かった。

研修期間中1度も意欲が揺れなかった学習者群（以下、意欲維持群）がどうして意欲を維持できたのかを分析した結果、「必要性」、「能力の向上」、「他者の存在」、「夢・目標」などのカテゴリーが抽出された。

第5章 意欲の低下

まず、学習意欲低下要因の下位尺度について検討を行った。抽出された因子は「教師」「課題」「自信喪失」「緊張感喪失」の4つであり、中でも「緊張感喪失」が最も大きな要因であることが認められた。「教師」因子は最も低く、研修期間中の教師と学習者の関係が

良好であったことも証明された。しかし、「教師」と「自信喪失」との間で中程度の相関が見られたことから、「教師」と「自信喪失」の間に何らかの関わりがある可能性も示唆された。

次に、学習意欲低下要因の項目ごとに属性による差異について検証を行った。その結果、K 6 群においては「緊張感の喪失」要因が突出しており、研修期間が長くなると「緊張感の喪失」が大きく関わってくることが示唆された。自信喪失に関する項目では研修参加以前の日本語既習歴なし群と既習歴 300 時間以上群で高い平均値を示していた。さらに既習歴 300 時間以上群では自己成長が認識しづらいことによって意欲低下を引き起こす可能性が認められた。既習歴 300 時間未満群では以前に所属した学習機関の影響が研修当初に見られることも分かった。

さらに研修期間を前期、中期、後期に分割し、意欲低下がどの時期に起こったかによって意欲低下要因の認識に差異が見られるかを検討した。前期揺れ群にはK 3 群では既習歴のない学習者が多く含まれており、未適応による「授業の速さ」から意欲が低下する様子がうかがえた。中期揺れ群ではK 3 群、K 6 群ともに「自信喪失」による意欲低下を認識していた。後期揺れ群では「緊張感の喪失」「ホームシック」「自己成長が認識しづらい」ことが大きな要因となっていた。

第6章 意欲の推移

意欲維持群の減少過程を観察した結果、K 3 群、K 6 群ともに類似の傾向が見出された。また、K 6 群のほうで減少率が緩やかであったことから、ゴール地点を見据えたペース配分を行っている可能性が示唆された。

どの時期にどのような原因で意欲が低下したかを分析した結果、研修前期に意欲が低下した原因は日本語学習にすぐに適応できなかったことが大きな原因であること、研修に適応できた協力者でも学習項目の難易度が上昇すると意欲低下を認識し始めること、何らかの「変化」によって一時的に意欲は低下するがすぐに再生すること等がわかった。

第7章 意欲の再生

前章では意欲が一度も揺れなかった学習者の減少について検討を行ったが、ここでは意欲が揺れたものの、意欲を再生させた学習者の存在についても併せて検討を行った。その結果、研修期間が長くなると一度再生させた意欲も再度揺れることがあり、再生させた意

欲を維持し続けることの難しさも見られた。

次に意欲再生ストラテジーについて自由記述による回答を求めた結果、適度な「リフレッシュ」、「重要な他者の存在」に対する働きかけ、「夢、目標、目的」の想起が大きな要素であった。K 3 群よりも K 6 群のほうがストラテジーが多様であり、より具体的な内省を行っていることがわかった。

第 8 章 結論

今回の調査で、既習歴の長い協力者らはかなり自律的に意欲をコントロールすることに成功していたように思われる。そこで、今回の調査結果をもとに、学習者が意欲を自律的にコントロールするためのストラテジーを獲得するための留意点について提言することによって本稿のまとめとしたい。

1) 意欲推移モデルの作成

第 6 章では K 3 群と K 6 群の意欲維持群の減少率を表したグラフにおいて、その推移過程が類似していることが明らかになった。この 2 つの群は期間の長さこそ違うものの、研修環境はほぼ同質であった。ただし、研修参加者に重複はなく、講師も大部分が入れ替わっている。それにもかかわらず類似傾向が現れたということは、学習者の目的や学習環境の質が類似していた場合、意欲維持群の推移傾向は類似性を示す可能性が高いということになる。したがって、意欲維持率の推移モデルを導き出すことができ、学習者群全体の意欲の推移傾向を知ることができる。意欲の視点からコースデザイン、カリキュラム作成等に生かすこともできよう。

2) 意欲低下要因の把握

山本（2007）では意欲の低下要因を知り、教師がそれを意識したクラス運営を行うことで、「緊張感の喪失」および「学習内容による不満」からの意欲低下が抑えられる可能性が高いことが述べられている。ここでは具体的な方策は特にとられておらず、何が原因で意欲低下が抑えられたのかも究明されていない。つまり、教師が意欲低下要因を知ること自体が重要であり、教師が試行錯誤を行っていくことがよりよいクラス運営への第一歩であると言える。

3) 学習環境特有の自律的学習動機因子の発見

自律的学習動機についてはこれまで日本語教育においてほとんど取り上げられることがなかった。学習に対して自律的であることが動機づけに対して大きな影響を持つことは内発的動機づけ理論上で明らかにされているが、何が自律的であるのかは風土によって異なる。その国における「自律的学習動機づけ」因子を把握することは、学習者の自律度を高める実践を行うために必要不可欠なものであろう。多因子への影響が大きい「環境独特の学習観」を発見することによって、正の影響を強化し、負の影響を抑えるための参考とすることができる。

4) 意欲再生ストラテジーの獲得

当研修での協力者の傾向を見ると、自分なりのリフレッシュ法を持ち、他者の存在と夢・目標の認知が非常に有効であったことがわかる。自律学習の促進には言語学習ストラテジーを用いることが有効であると言われるが、当研修における自律学習支援では学習方法の共有等で「直接ストラテジー」の育成と、ポートフォリオ等の振り返りによる「間接ストラテジー」の育成がなされたと言える。この「間接ストラテジー」の下位概念である「メタ認知ストラテジー」の発達在意欲再生ストラテジーの獲得につながったのであろう。たとえわずかな時間でも、振り返りの促しや学習方法の共有を行うことで、自律性の発達が促進される可能性があることをここに提言したい。

本稿では意欲の維持・低下・推移・再生の4つの視点から、インドネシアでの事例を取り上げ、意欲の自律的なコントロールの可能性について検討を行った。データは2回分のものであるため、可能性を提示したにすぎない。しかしながら、これまで一時点にのみ注目した動機づけ研究が多かった中で、長期間にわたる意欲の推移のプロセスを総括できたことはひとつの成果であったといえよう。

今後は意欲再生ストラテジーの獲得に向けて教師がどのように誘導していくか等、これまで提言した可能性を実証していくことを課題としたい。さらに、意欲を自律的にコントロールするストラテジーの育成に向けて実践を行い、よりよいトレーニング法を確立していきたい。